

氏名(本籍)	木庭康樹(茨城県)		
学位の種類	博士(体育科学)		
学位記番号	博乙第2184号		
学位授与年月日	平成18年2月28日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	プラトン哲学における身体論 —ソーマ概念の体系的考察を通して—		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	佐藤 臣彦
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	阿部 生雄
副査	筑波大学助教授	教育学博士	清水 諭
副査	筑波大学助教授	Dr. Phil.	長田 年弘
副査	筑波大学講師	博士(文学)	久保 徹

論文の内容の要旨

(1) 研究目的

本研究は、古代ギリシアの哲学者、プラトンの身体論について、体育哲学的な関心を踏まえつつ、「身体」を含む広範な外延をもつギリシア語のソーマに対し、①原理、②自然、③技術、④国家社会といった四つの観点から体系的な考察を行い、人間の身体の様相を、自然のみならず技術や社会との関わりの中で明らかにしようとするものである。プラトンには身体論を直接的な主題とする著作はないものの、ソーマについてはほぼ全著作で言及されており、それらに内在する論点は、現代の身体観を相対化するとともに、「存在論的身体論」から「生成的身体論」へのパラダイム変換を促す駆動力を有していることを示そうとしている。

(2) 研究方法

本研究では、プラトンの全著作について、ギリシア語原文と日本語訳を対応させたデータベースを作成したうえで(3533件:FileMaker使用)、計944件に及ぶ「ソーマ」およびその関連語を対象としつつ、他の鍵語についても用例検索等を厳密におこないながら考察を遂行している。また、プラトン最後の著作である『法律』に着目し、本編における「ソーマ」の用例の検討から身体論の基本的枠組みを抽出するという方法論が設定され、結果として「ソーマの原理的特性」「自然学におけるソーマ」「製作学におけるソーマ」「政治学におけるソーマ」という4つの構成原理を導き出している。

(3) 論文構成と概要

本論文は、序論(予備的考察:①問題の所在、②先行研究の検討、③研究の方法と課題)、本論全4章、および結論(本研究のまとめと今後の課題)から構成されている。

第一章「ソーマの原理的特性」では、あらゆる物的対象を指示するソーマについて、プラトン哲学の原理や方法にもとづきながら原理的特性についての検討を行い、「もの」としてのソーマが、「空間性」「運動性」「感覚性」といった三つの特性によって原理的に規定されていることを明らかにしている。まず「空間性」については、ソーマが充実空間に投影されたアイデアの似像であり、アイデアの幾何学的形象化によって成立した「立体性」で

あること、「運動性」については、もともと粒子（四元素）の偶然の衝突が必然によって引き起こす無秩序で直線的な「他動性」を常態とするが、ソーマが心魂や知性と連関する場合には、自律的で斉一的な円環運動を得るにいたること、また、「感覚性」については、粒子の立体的構造の多様性を生み出す「パテーマ（情態変化・感覚的諸性質）」を根拠とし、無知や偶然によって放置される場合には心魂や人体に様々な悪をもたらし、逆に知性の支配に与る場合には善の実現や秩序の回復に寄与するものであることをそれぞれ明らかにしている。

第二章「自然学におけるソーマ」では、プラトンの自然学の構成原理にもとづきながら、①不死なるもののソーマ、②素材としてのソーマ、③死すべきもののソーマ、についてそれぞれ考察を進めている。「不死なるもののソーマ」（宇宙のからだと天体のからだ）の不死なる所以が、永遠なるものの本性にできるだけ似るように工作者の善なる意志にあるのに対し、「素材としてのソーマ」（単純物体と化合物）の素材たる所以は、それが非合理的な必然によって無秩序に動かされながらも神々の製作活動に必要とされるという点に求められている。また「死すべきもののソーマ」（動物体や植物体、死体、人体）の死すべき所以は、工作者に次ぐ神々の善なる意志と両義的な意味を持つ必然との間に根拠が求められ、自然（ピュシス）としての人体もまた「死すべきもののソーマ」の一環であり、美しき善き宇宙に見出される人体の本来のあり方は、善と必然の階層的秩序、宇宙とのシュンメトリア（均衡）、さらには、円環的な運動や自律的な運動によって構成されるものであることを明らかにしている。

第三章「製作学におけるソーマ」では、プラトンにおける技術の基本的性格にもとづきながら、技術（テクネー）によって生成される身体の様相を、①医術（イアートリケー）、②競技術（アゴニスティーケー）、③体育術（ギムナスティーケー）という身体にかかわる3種のテクネーを中心に、それぞれの基本的性格や製作過程を明らかにしつつ人為的に形成されることになる身体の卓越性について検討している。その結果、テクネーによって作られる身体の理想型が、ギムナスティーケーや医術の所産である個々の身体の卓越性（強さ、大きさ、美しさ、速さ、体力）のすべてを兼ねそなえたエウエクシア（よき状態）に見ることができるとし、また、競技術の観点からは、競技的身体が有用性の機能美や競技に特有の感情を生み出し、人々の性格形成や共同体の一体化に深く関わりつつも、個々の競技種目に必要とされる形態や能力に偏っていることが示されている。さらに、ギムナスティーケーについて、心魂（プシューケー）の教育における他の学科との相互補完性や代替可能性だけでなく、技術の合目的性や体系性のゆえに求められる従属性という点に限界が認められることを確認している。

第四章「政治学におけるソーマ」では、プラトンの国制論や法理論にもとづきながら、①国制の変化と身体の頹落、②次善の国制における法と身体、③最善の国制における教育と身体、という構成によって考察を進めている。①では、人間の身体が、名誉支配制から寡頭制、民主制、僭主制への国家体制の変化に伴い、戦争や運動競技のために極度に専門化されたものから、肥満したもの、無力で病的なもの、痩せたもの、多様なもの、病気に冒されたものへと徐々に頹落していくことを明らかにしている。②の次善の法治国家においては、運動競技や文芸競技がエウエクシアを目指すギムナスティーケーの教材として位置づけられ、自然環境や自然的素質に従って人間の身体を習慣によりあらゆる目的に役立つ万能なものに作り上げるべく立法や勸告がなされていること、平時においても有事においても節制や勇気の徳を発揮するうえで、ある一つの卓越性に秀でた身体ではなくあらゆる目的に役立つ身体が必要とされていることを明らかにしている。③では、プラトンにとって、教育の最終的な目標である徳こそが最善の国制の根幹であり、最善の国制におけるギムナスティーケーは、徳を目指すムーシケーの数学的秩序づけの結果、「正しさ」すなわち「幾何学的な真実性」を得ることになるとし、ギムナスティーケーによって正しく作られた身体が、その幾何学的な真実性を通じて、これを見る人に（善）や（美）のアイデアを想起させるとともに、健康のアイデアや強さのアイデア、大きさのアイデアといった身体のアイデアを認識することを促すこととなり、理想国家への道程において、人間の身体の理想的な生成が自然（ピュシス）と人為（ノモス）が織りなす円環的なプロセスのうちに展開されるものとしている。

審査の結果の要旨

本研究は、プラトン哲学における身体論を、広大な外延をもつ「ソーマ」の体系的考察を通して明らかにしようとするものであるが、人間の身体のあるべき姿を、①自然、②技術（人為）、③国家社会、という基本枠組みのもとに体系的な再構成を試み、説得的議論の展開によってその目的を達成している。まず手順として、プラトンの全著作について、ギリシア語原文と日本語訳を対応させたデータベースを独自に構築し、テキストに基づく議論を精確に展開する上での万全の態勢を整えたことが高く評価された。そのため、逆に議論の展開が枝葉末節にまで及んでしまう傾向もみられたが、しかし、プラトンの著作全体に散在するソーマに関する記述を「自然と人為」という基本軸の設定によって体系化する方法論を工夫することで、論文構成にみられるような基本的観点からまとめ上げた力量には高い評価が与えられた。また、プラトン哲学における身体論を体系的に展開したこうした試み自体がこれまでにないもので、研究のオリジナリティという点についても高く評価された。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。